



新春座談会

三重の地域創生

人を育て 地域を活かし 豊かな社会をつくる



株式会社百五総合研究所
代表取締役社長

荒木 康行



国立大学法人三重大学学長

駒田 美弘氏

人手不足が恒常化する中、製造業を中心に新技術への対応、国際競争力の強化が求められており、若い優秀な人材を求める声が高まっています。一方で、高等教育機関には企業との共同研究・共同プロジェクト等を通じた地域が抱える課題の解決が望まれています。そこで大学のあり方、人材育成、世界トップレベルの研究、三重県内4地域に拠点を置く地域拠点サテライトの役割について、国立大学法人三重大学の駒田美弘学長にお伺いしました。

「三重創生ファンタジスタ」 養成事業について

荒木 駒田学長は就任以来、三重の創生、地域人材の育成のために各地を精力的に訪問されておられます。百五銀行、百五総合研究所も三重大学との連携協議会を立ち上げ、指導いただいています。また、地域イノベーションに貢献できる人材の育成を目的とした「三重創生ファンタジスタ」養成事業に積極的に取り組まれておられます。これは文部科学省の「地(知)の拠点大学による地方創生推進事業(COC+)」における三重県での取り組みとして始まったわけですが、この事業に取り組まれた思いはどのようなものでしたか。

駒田 三重大学としてやるべきこと、三重大学にしかできないことに取り組むことが大事だと考えました。三重県の

地域発展に役立つこと、もうひとつは三重県のことをよく知り、三重県を好きになる学生を育てることです。この2つを考えたとき、「三重創生ファンタジスタ」の目指す人物像がイメージできたと思います。自分で考える力、解決策を見つける力、地域の課題を分析し発見する力を持った人物です。

荒木 企業として、自分で考え、課題を発見できる人材を育てていただくのはありがたいです。「三重創生ファンタジスタ」プログラムにはインターンシップという項目があります。三重県のことを学んだ学生を受け入れることで、企業もさらに成長できる素晴らしい事業だと思います。三重大学だけでなく県内全ての大学、短大、高等専門学校が連携されていますね。

駒田 三重大学だけでは地域を良くするこ

とはできません。三重県内の14の高等教育機関と企業、行政がそれぞれの強みを生かしながら進めている事業です。すべての高等教育機関がそれぞれの強みを発揮することによって、すべての学生が三重県を好きになり身につけた能力を社会で発揮してもらいたいと思っています。大学が地域と協働するモデルになるのではないかと思います。

荒木 「三重創生ファンタジスタ」のプログラムをみると、食と観光分野、次世代産業分野、医療・福祉・健康分野において、他者と協働して課題の解決策を提案できる力の養成を目指しています。まさに三重県が解決しなければならぬ項目ですね。

駒田 三重県が得意とする分野あるいは今後の成長分野、注力が望まれる分野を取り上げたかと考えていただければと思います。

県内に学生が 残ってもらうためには

駒田 毎年、約1300人が三重大学を卒業しますが、県内に就職する学生は

34%です。企業の方に話を伺うと「人材不足」だとおっしゃいます。企業が発展、成長していくためには地域で活躍できる人材の育成がカギになります。

荒木 34%とは驚きです。

駒田 三重大学だけの数字ですが、三重大学ファンタジスタ事業もあつて、近年、



習で、企業から見れば学生に事業を理解してもらうこと、その先には採用という目的があります。互いに見る方向や見る面が異なるとはいえず、やる事が同じであれば、一緒に取り組めることは可能です。企業の魅力や働くことの面白さを学生が体験することで、自分の至らない部分、欠けている部分があれば、我々から見ると教育的な観点といえます。ただ、三

県内就職率は上がってはいますが、まだ低いと感じています。

荒木 県内の高校を卒業した人が県外に進学する比率が高い中、県内の高等教育機関に進んだ学生が県内で就職する人数となると本当に限られますね。

駒田 三重県内の高校の卒業生が8000人弱、一方、県内の4年制大学の定員数は3000人程度です。大学収容力は全国でも最下位に近いのが実態です。

荒木 県内で進学したくても、望む大学がないということですね。

駒田 量的な問題に加え、学生にとって魅力的で質の高い教育を増やすことも重要です。そういう意味で大学間の連携は非常に良いことだと思います。

荒木 他大学の学生が三重大学でファンタジスタの科目を受講し単位を取得できるという制度は画期的ですね。

駒田 三重大学ファンタジスタでは学部の異なる学生、他大学の学生と一緒に教育を受けられることがメリットです。自

重大学の学部生だけでも9000人近いですから、企業の方には受け入れのご協力をいただかないといけません。企業の方に現場で教育していただくことは大きな労力になるわけですが、

荒木 当社でも社員と一緒に事業や研究を行うつもりですが、社員にはプラスになると思います。受け入れ側の意識も変わってきており、むしろそうなるべくしたいと思います。

駒田 教室で学ぶことに比べて、最前線で活躍されている方から学ぶことは、教育的なインパクトが違いますし、現場を見る価値は大いにあります。

荒木 2019年度で、国の事業としての「三重大学ファンタジスタ」は終了しますが、素晴らしい仕組みを作り上げていただいたわけですから、ぜひ継続していただきたいと思っています。

駒田 「三重大学ファンタジスタ」の名前を県内の隅々まで届けられるよう、他大と協力しながら続けていきたいと思っています。

分の専門分野に限らず隣の、あるいはもっと遠い分野の学問と一緒に学ぶことは、学生の成長にとっても有意義なことではないかと思っています。

インターンシップの変化

駒田 企業においては「三重大学ファンタジスタ」を公的な資格の1つととらえていただき、それ取得した学生は企業や社会で活躍が十分期待できる人材だと評価していただけるとありがたいです。

荒木 当社は2018年度実績で、11人のインターンシップ生を受け入れていました。従来型のインターンシップというと、表面的な関わりで終わっていたと思いますが、ファンタジスタを育てるのであれば、学生の受け入れ企業は事業の奥深くまで見せて、実際にやらせてみせるくらいの覚悟が必要になるかと思っています。

駒田 まさに私たちが考えているインターンシップです。三重大学では2019年度入学生からインターンシップを卒業するための要件としました。大学から見るとインターンシップは現場体験実

トップレベルの共同研究

荒木 世の中が激動する今、企業はどうやって生き残るかを真剣に考えています。企業と大学が共同研究などで協力できる機会が増やせないかと思っています。

駒田 学長就任後に訪問した企業の経営者の方々は皆さん「三重大学は敷居が高い」とおっしゃいました。相談があれば大学まで来てくださいというこれまでの姿勢ではスムーズな連携は不可能です。例えば銀行には各地に支店があるように、三重大学では敷居を低くするために県内4ヶ所に地域拠点サテライトを設置しました。

荒木 4つの地域に特徴のある拠点をつくられていますね。三重県ならではの分野であり、三重大学ファンタジスタの思いと共通するものですね。先日、四日市の北勢サテライト（知的イノベーション研究センター）で開催された共同研究の発表を聴講して、三重大学の研究者が日本あるいは世界トップレベルの研究をされていることがわかりました。



国立大学法人三重大学学長

駒田 美弘氏

Profile

1952年三重県津市出身。1976年三重大学医学部卒業、1980年同大学院医学研究科博士課程修了。専門分野は小児血液・腫瘍学、腫瘍免疫学、小児の地域医療。医学博士(三重大学)。1980年三重大学医学部附属病院に入局後、講師、助教授等を経て1999年医学部附属病院小児学講座教授、医学部附属病院小児科長、2001年医学部附属病院周産母子センター部長、2006年大学院医学系研究科長・医学部長。2015年に国立大学法人三重大学学長に就任。

駒田 地域に研究成果を還元し企業と協働することを考えれば、教育や研究は当然世界トップレベルでなければおつき合いいただけないと思っています。

荒木 三重大学が企業とトップレベルの共同研究をしたり、逆に企業が大学の研究サポートで新しい技術を開発できたら素晴らしいと思います。北勢地域はものづくり企業が集積していますが、共同研究、協働プロジェクトはどのような内容が多いですか。

駒田 共同研究の内容を見ると、本業とは異なる分野で共同研究を行っている企業が多くあります。将来の可能性

という展開が生まれると面白いですね。

駒田 そういう考えができる能力の高い学生は必ずいます。彼らにチャレンジングな環境を与えることも大学と企業と協力できるかもしれません。それが大きく育てば、非常に素晴らしい。

荒木 世界トップクラスのアスリートを見ると、成長過程では必ず誰かのサポートを受けています。経済界でも、企業がサポートした起業家が生まれると面白いと思います。三重県には面白い企業、オンリーワン企業が多い。かつ、百年超える伝統・歴史を持つ企業も多く、県内で670社を超えています。老舗といえども同じことを続けるだけでは長続きしない。代替わりなどの折々で、自社の一番の強みを活かしながらも常に新しいことを採り入れてやっています。

駒田 そのようなことも学生が学ぶべきひとつだと思います。百年続く企業がなぜ続いているのかを現場で見て話を聞き、自分で感じる事が本人のキャリア発達にとっても良い影響を与えたいと思います。大学にシーズがある企業にニーズがある場合はもちろ

や事業の展開を探る中で共同研究を考えていただけるといいですね。

荒木 世の中が目まぐるしく変化し、先が見通せない時代ですから、何がどう生まれ変わるかわかりません。

駒田 例えば、電話は面倒だから、いつそテレパシーで意思疎通できないかと考える人が現れるかもしれません。流れている情報に脳の神経細胞をつなぐと、荒木社長の考えていることがすべてわかるような(笑)

荒木 恐ろしいですね(笑)

ん、逆に企業の素晴らしい技術やノウハウを大学の研究者が利用させていただく。それが共同研究の双方向性だと思います。

海女文化と水産学研究

荒木 伊勢志摩サテライトは伊勢、志摩、鳥羽など地域の歴史文化を世界に発信する拠点と謳っています。鳥羽市には「海女研究センター」をつくり、海女を切り口とした教育研究を行い、自然との共生・共存を発信されているとのことですが。

駒田 海女の歴史文化は非常に重要ですが、水産業も非常に盛んな地域です。三重大学の水産実験場を新しく鳥羽に移転させますが、伊勢志摩地域には県の水産研究所、国の研究所、鳥羽水族館があり、鯨類や真珠の研究など水産学の拠点地域です。このような場所は国内にありません。海女の歴史文化とともに、水産業・水産学についても世界に発信するポテンシャルがあると考えています。

荒木 当社も2019年秋、鳥羽市の受託業務で海女文化をフランスに発信す

駒田 もちろん研究倫理やコンプライアンスは遵守しなければなりません。恐ろしいくらい可能性があると思います。良い研究を進めていくには、大学の発想に加え、企業的な思考も必要になると思います。

荒木 AIがさらに発展していくと、人間が考えも及ばない展開があるかもしれません。企業は真剣にとらえないと、存在意義がなくなる可能性があります。

駒田 新しい仕事や企業が生まれていますね。学生に望んでいることは、就職して頑張ることがひとつ。もうひとつは自分の発想とエネルギーをもとに企業を立ちあげることです。1人で事業を立ちあげるのは難しいですが、同じ気持ちを持つ企業の方々と一緒になれば新しい事業はつくれます。スピニアウトとかスピニアフといったかたちでの企業づくりにも注目していただくと思います。可能性を持つ企業は三重県内にもたくさんある気がします。

荒木 アイデアを持っている学生に「面白い。資金は出すから一緒に研究しよう」と

る事業のお手伝いをしました。鳥羽市の訪問団が現役海女さんを連れてパリでトークショーを行ったところ、現地のメディアも含め多くのフランス人で会場は満席になりました。フランス人は海女や海女文化が2000年以上続いていることについて非常に興味を持っていて「なぜそんなに続いているのか」などの質問が矢継ぎ早にありました。海女文化に興味を持った方が当地に観光に来ていただけたらと願っています。

駒田 文化の紹介が地域の繁栄や観光につながることはとても大事だと思います。インターンシップ同様に、大学にとつては研究ですが、地域にとつては観光の拡大につながっている。海女さんがずっと海女を業とするためには、水産資源を保ち増やす研究や水産資源再生の研究も大事です。文化と業の両面の持続が必要だと思います。

荒木 フランス人は、現在も素潜りで乱獲をせずに海の恵みを守ることで、海女文化を持続可能にしていることに非常に感銘を受けているようです。



株式会社百五総合研究所 代表取締役社長

荒木 康行

Profile

1957年三重県津市出身。1980年百五銀行入行。亀山支店長、中部法人営業部長、本店営業部長を歴任し、2009年に取締役、2013年に常務取締役に就任。2015年6月に百五総合研究所代表取締役社長に就任。

三重を越えた先は海外

駒田

三重県は、全国各地の様々な状況を縮図にした県です。南部は過疎地域で高齢化率が高く、北部はものづくりが盛んで人口も多い、山側と海側の地域では文化が違います。いろいろな切り口で教育や研究ができます。教育学部であれば、南部では複式学級の研究や教育実習、北部ではマンモス校の教育実習ができます。両方とも教員を目指す学生にとって必要な経験です。

荒木

三重県は教育や研究にとって魅力的なフィールドということですね。

駒田

私は、三重県を越えた先は海外だと考えています。アフリカやマレーシアなどグローバルに進出することも必要だと思います。地域創生する能力は、海外進出においても使えます。三重県は世界や日本の縮図ですから、三重を創生できれば当然海外でもその力を発揮できます。三重創生フアンタジスタはそのような人材を育成する場と考えていただくとありがたいです。

荒木

マーケットを人口だけでとらえると、日本は次第に縮小していきます。三重県の外は世界という目線を持つ必要がありますね。

大学が目すべきキーワードは「防災」と「環境」です。三重県は津波の脅威があり、防災ということをおくわけにはいかない。また、四日市市は公害問題を協働で克服された素晴らしい環境先進都市です。三重大学が取り組むべき教育・研究の非常に大きな領域だと考えています。環境にやさしい大学であると同時に、環境マインドを持った学生の育成も

荒木

大きな責務、役目だと考えています。インパクトランキングについても狙ったわけではなく、大切なキーワードとしてとらえて活動していることが評価された結果だと思っています。

駒田

環境・防災について学んだ学生が社会で活躍し、その活動を広げていただきたいと思っています。また、文部科学省の「産学官連携リスクマネジメントモデル事業」でも、参加31大学中の代表4大学に選ばれ、モデルとなる取組体制・システムの構築に取り組みされていますね。

リスクマネジメントがしっかりしていなければ、共同研究や特許取得には困難ですし、企業と協働していくことはできません。三重大学は特許取得に力を入れ、特許収入は全国の大学で5位になりました。これも結果として評価いただいたことなのですが、企業に認められることにつながります。大学は研究や教育に打ち込めるという非常に恵まれた高等教育機関です。そういった大学の魅力をもっと感じていただけたらうれしく思います。大学は、自分の能力を最高レベルに引き上げ、人生のキャリア発達を

駒田

合言葉は「Think Globally、Collaborate Internationally、Act Locally」なんです。地域で頑張りがらも世界のことを考える。三重大学も海外の大学との協定を119校と結び、教員が交流しています。例えば、医学部は医学教育の国際認証を取得します。現状の三重大学の医学教育がグローバルスタンダードかという点必ずしもそうではない。三重大学で医師免許を取得してもアメリカでは働けない。医学教育は国際スタンダードでないといけないと思います。研究も教育も国際化を図っていく必要があります。

継続的な取組みが高評価へ

荒木

三重大学は、国連が掲げる17のSDGsのうち、大学の活動に深く関連する11項目について指標化した「THE大学インパクトランキング2019」の「つくる責任・つかう責任」において日本国内1位、世界で31位にランクインしています。世界トップレベルで環境先進大学を実践されていますね。

駒田

三重という地域を考えたとき、三重を考える場所です。もちろん社会に出た後にリカレント教育でもう一度自分を鍛え直すことも良いと思います。eラーニングで自宅学習もできますから、社会で活躍されている方のお役に立てればと思います。

新年の抱負・心がけていること

荒木

学長の新年の抱負をお願いします。

駒田

少子化、高齢化、環境など様々な問題が複雑化し、情報もあふれる大変な世の中となり、ある意味、暗さがありますね。「夜明け前は一番暗い」といいます。2019年は「夜明け前」。2020年は、夜が明けていろいろなものが明るくなり、三重大学にとって「進化の年」になるのではないかと思います。変わらなことは衰退していくことですから、改革や改組、そして変化がなければ発展はない。2020年は明るい太陽の下で進化する年にしたいですね。

荒木

お正月から明るいお話をありがとうございます。学長が今、心がけていらっしゃることは何かありますか。



※Sustainable Development Goals(持続可能な開発目標)

三重創生ファンタジスタ資格とは

三重県は全国2位の経済成長率(*)を誇り、とくに製造業を中心とした生産力の向上や周辺産業の創出に対して、若い優秀な人材を求める声が高まっています。伊勢湾に育まれた海の幸や南北に長い地勢から生まれる山の幸、日本人の心の拠り所である伊勢神宮や世界遺産・熊野古道、自動車産業の夢の舞台である鈴鹿サーキットやMRJに代表される航空宇宙産業など、数多くの地域資源をいかにして産業に結び付けるかの地域イノベーションが期待されています。 ※2009-2018 県民経済計算より

文部科学省「地(知)の拠点大学による地方創生推進事業(COC+)」における三重県での取組みとして、三重県内の全高等教育機関(四年制大学、短期大学、高等専門学校)と県内企業、自治体が協力してこれらの地域イノベーションに貢献する人材「三重創生ファンタジスタ」を養成しています。学生たちは地域について学ぶ授業やイベントなどを通し、課題解決能力やリーダーシップ、コミュニケーション力を現場で身につけ、地域で活躍する人材を目指しています。

「三重創生ファンタジスタ」とは…

状況や事態を的確に把握し、複眼的な視点から柔軟で想像力と創造力に富んだ発想や思考ができ、行動力とリーダーシップを発揮しながら、周りの人と協働できる人材

現在、この資格には下図のように3つのクラスがあります。三重創生ファンタジスタ資格を取得した学生は、段階的にステップアップし、地域に貢献するための知識や行動力が養われます。これらのプログラムにより様々な科目で三重を学んで、三重の課題に取り組む意欲の高い学生を養成しています。

地域の課題に応える三重創生ファンタジスタへ

エキスパート

高度な社会人基礎力を備え、地域課題の解決に主導的に取り組み、地域イノベーションを創出することができる

アドヴァンス

ベーシックで得られた地域への深い知識に加えて、地域が抱える固有の課題(食と観光分野、次世代産業分野、医療・健康・福祉分野)に対して、他者と協働して解決策を提案することができる

ベーシック

三重県の歴史・文化・産業等の特徴を理解し、地域が抱える課題に対して深く関心をもち、主体的な活躍を期待できる

駒田

私は健康のために早寝早起きをしています。4時半に起き、寝るのは10時位です。6時半には大学にきています。私が一番早いです。もうひとつは、元々の性格がそうなのですが、あまりよくくよせずに楽観的であることを心がけていますね。トップという職は楽観的でないとやっていけませんよね(笑)

荒木

そのとおりです(笑)
済んでしまったことはいくら考えても戻りません。先のことをポジティブに前向きにとらえようと思っています。

駒田

リーダーにはポジティブさが必要だと思います。指導者は「動き始める(始動者)」とも書きます。エンジンをかけて動き始める人です。マネージャーはものごとを正しく進める人で、リーダーは正しいことを始める人です。失敗やリスクはありますが、行動すること、あまりくよくよせずにまずやってみることが大切です。厚生労働省が再編の検討を求める424病院のうち、三重県は7病院が入っていました。再編の検討をしていかなければいけない時代に入っていることは事実です。しかし、大学も企業もそういう時下に入っていることを悲観的に考えず、

荒木

チャンスだと考えればいいのです。乗り越える力は企業、大学、地方自治体にあるはずですが、発揮していないだけだと思います。

駒田

日本は海外で戦争をしている地域に比べればとても幸せな状況で、問題に集中し、クリアできる可能性が十分あります。「一番悪いことは何も考えない、何もしないことである」とアインシュタインも言っています。変わらなくてもいいというような教育をしていたのでは、社会が衰退していきます。前向きに取り組める人材を大学で育成していくべきだと思います。自分で変えていくというたくましさは大学時代に付け、社会に出てからはさらに磨き上げてほしいと思います。

荒木

三重県の発展がますます楽しみにになりました。今後も様々な研究を通じて、人材育成や企業との連携そして地域創生をよろしく願っています。本日はありがとうございました。



(2019年11月5日 三重大学にて対談)

地域拠点サテライト

平成28年度から順次設置している「地域拠点サテライト」では、県内全域を三重大学の教育研究フィールドと位置付け、多様な地域特性を有する4つの地域サテライト（伊賀サテライト、東紀州サテライト、伊勢志摩サテライト、北勢サテライト）を展開しています。各地域サテライトにおいては、自治体・教育機関等との連携および協力のもとに、特色豊かな活動拠点が置かれ、教員や学生がフィールドワーク等の実践的な教育研究活動を行っています。

また、これら4つの地域サテライトが地元企業や自治体と大学を繋ぐハブ機能としての役割を担うことで、地域課題の発見・共有、共同研究・共同プロジェクト等を通じた課題解決等に全学的に取り組みながら、三重大学の教育研究力の向上に加え、地域創生や地域の人材育成に貢献しています。

伊賀サテライト

Iga Regional Satellite Campus

- **担当エリア**：名張市、伊賀市
- **伊賀サテライトの目標（旗）**：固有文化と地域資源の活用で地域再生に寄与する拠点
- **具体的活動内容**：忍者等の歴史・文化、医薬品企業との連携、森林資源の活用等

伊賀連携フィールド・国際忍者研究センター
(伊賀市:ハイトピア伊賀)

伊賀研究拠点
(伊賀市:ゆめテクノ伊賀)

知的イノベーション研究センター
(四日市市:ユマニテックプラザ)

北勢サテライト

Hokusei Regional Satellite Campus

- **担当エリア**：四日市市、桑名市、鈴鹿市、亀山市、いなべ市、木曽岬町、東員町、菟野町、朝日町、川越町
- **北勢サテライトの目標（旗）**：日本のモノづくりの真髄を体感し富を生み出す拠点
- **具体的活動内容**：自動車、石油化学、食品化学企業等との産学連携事業、企業人材のリカレント教育、モノづくり企業との連携による学生・若手教員の育成等

東紀州サテライト

Higashi-Kishu Regional Satellite Campus

- **担当エリア**：尾鷲市、熊野市、大台町、大紀町、紀北町、御浜町、紀宝町
- **東紀州サテライトの目標（旗）**：地域資源で富を生み力強い子供が育つことを支える拠点
- **具体的活動内容**：へき地教育、水産増養殖・加工業との連携、森林資源や観光資源の活用等

海女研究センター
(鳥羽市:海の博物館)

東紀州産業振興学舎
(尾鷲市:天満荘)

東紀州教育学舎
(熊野市:木本高校)

伊勢志摩サテライト

Ise-Shima Regional Satellite Campus

- **担当エリア**：伊勢市、鳥羽市、志摩市、玉城町、度会町、南伊勢町
- **伊勢志摩サテライトの目標（旗）**：歴史ある自然との共生・共存の思想を世界に発信する拠点
- **具体的活動内容**：食と観光産業による地域創生の研究（歴史文化の交流、海女文化、水産資源の活性化、食品の6次産業化、観光資源の活用など）、地域人材の育成等



■ 自然環境リテラシー学（東紀州サテライト）

現地実習を通して、自然環境を体験的・実感的に学び、その知識や技能の習得や、持続的な保護や責任のある行動をとれる倫理観、自然災害を生き抜く力などの養成を目的としています。



■ 健康福祉システム開発研究会（北勢サテライト）

行政人材や企業人材と意見交換をしながら、福祉分野における課題抽出から社会実装までの一連の流れについて研究し、持続可能なシステム開発を目指します。